



神田外語大学教授

長谷川 信子

ローガンであらう。

多くの日本人は、強烈な英語コンプレックスをもつ。多大な時間と苦勞を費やしたにもかかわらず「英語を使えるようにならなかつた」という怨念がある。せめて日常会話、海外旅行で用を足す程度の英語だけでも身につけたかったという強い願望がある。それは、翻つて、異なった教え方を受けていたなら、自分も楽しく英語が使えるようになったに違いない、との思いにつながる。

そんな日本人の「夢のような教育法」への希求が「神話」となる。その「神話」は、昔の語学学校や英語教材の宣伝に利用され、2020年の東京オリンピック開催決定で、さらに浸透する勢いである。「英語で、おもてな・し」は格好のヌ

しかし、日本の将来を見すえて教育の根幹を提示する学習指導要領が、ただ英語に触れ、使う機会さえ増えれば英語は習得できるといつ「昔の神話」に加担し、「英語で授業が基本」といった方針をさらに中学校英語にまで適用させよとする動きには大いに警鐘を鳴らしたい。

「神話」は、新たな方針の推進を願う者には、便利で強力な武器となる。しかし、神話は真実ではない。国をあげて「根拠のない神話」にまい進することの危険は、すでに、ゆとり教育神話、原発の安全神話などで、痛感しているはずだ。「神話」「国民の夢」の実現には、それを担保するだけの「段階を踏んでの目標設定」「相応の苦勞」「困難の克服」

コミュニケーションを超えた言語として

なくしては、中途半端で使い物にならない代物を生み出すだけである。

英語教育も然り。口当たりのいい「英語コミュニケーション」に到達できる英語力は、せいぜい、眼前事象で用を足す程度、友人・同僚同士の会話程度、である。それが「国をあげて求める日本人の英語力」でいいはず

がない。それは、国が本来求め、意識ある個人が目指す「真のグローバル人材」につながる英語力にはほど遠い。

あえて言おう。眼前事象を扱う程度の「コミュニケーション」は、人の知的活動を支える「言語」とは「似て非なるもの」であり「質的に異なる。言語は、

眼前事象を超え、過去にも未来にも、仮想事態にも対応し、抽象的で高度で複雑な思考を表現できる体系である。それを保証するのが、文法であり文構築の基本である。その体系は、日本語と英語の大きな違いを考えれば、外国語教育(EFL)環境でたかだか週に数時間、英語に触れる程度で把握できるようになる程容易なものではない。文法、語彙、日本語との相違などを含め、明示的的確な指摘・意識付けなくして不可能である。

しく、華やかで目を引く。しかし、花束にいくら水や肥料(英語を使う環境)を与えても、それ以上は育たない。他方、樹木は、種から、根・芽を出し、幹・枝を広げ、青々とした葉と美しい花をつけ、さらに成長する。確かに、芽が出る前に英語を諦めてしまった多くの大人には、花束でいいという意見もある。しかし、グローバル時代の日本の将来を担う子どもたちには「花束」では不十分である。花束が必要とは言わない。眼前事象で用が足せ、持っているだけでも嬉しい。しかし、学校教育では、種から根を張らせ若木の幹と枝

比較も含め明確に意識させ知識として学ばせる。せめて単文レベルの英語の文法と仕組みはしっかり定着させたい。その際、日本語を用いて的的確な指摘は不可欠である。もちろん、日常会話を含め、様々な語用的状況で創造的に英語を使う教室活動に異存はない。しかし、花束の楽しさに満足するのではなく、その限界を明確に認識し、樹木として成長する可能性につながる読み書きを含めた英語の体系の基本的習得を目指すこと、それが基本である。

コミュニケーション志向の英語教育の結果生み出された現在の高校生、大学生の英語の基盤の脆弱さ、作文力、読解力の崩壊は著しい。かといって、知的な会話力・発信力が身につけていないわけではない。次の学習指導要領では、勇気をもってこの方向を見直してほしい。ゆとり教育と同様の失敗を英語教育で繰り返すことは何としても回避すべきである。

私の提言は、以下である。小学校英語では「花束」でもいい。身の回りの語彙や定型表現を口移して覚え、楽しい「コミュニケーション」もときどき「よし」としよう。しかし、中学英語では「言語」の種を撒き根を張り芽を出させる方向に質的に転換し、「コミュニケーション」の背後にある英語の体系を日本語との

小学校で花束、中学校で種撒きから発芽、そして、高校で樹木への育成へ。各段階の目標を明確にし、「コミュニケーション」を超えた「言語」としての英語へ、メリハリのある導入・育成を行うこと。それを、次期学習指導要領には求めたい。

英語神話からの解放を

「言語」を「樹木」に例えるなら、単語や定型表現で可能な「コミュニケーション」は、さしずめ「花束」である。一見美

「言語」の種を撒き根を張り芽を出させる方向に質的に転換し、「コミュニケーション」の背後にある英語の体系を日本語との

小学校で花束、中学校で種撒きから発芽、そして、高校で樹木への育成へ。各段階の目標を明確にし、「コミュニケーション」を超えた「言語」としての英語へ、メリハリのある導入・育成を行うこと。それを、次期学習指導要領には求めたい。